

世界のアドラー心理学とその日本の特徴

鎌田 穰（大阪市立大学）*

* 論文執筆当時

要旨

キーワード：

<序>

1982年に野田俊作が日本に現代アドラー心理学を紹介して以来、8年経った。その間に、医療・矯正・教育・企業関係を中心に、アドラー心理学は徐々にではあるが広まりつつある。国際個人心理学会の支部である日本アドラー心理学会も、1984年に第1回総会を開催して以来すでに6回の総会を開催した。会員数も今では450名を越えている（1990年7月現在）。学会認定の基礎講座や旧初級講座を終了した者は1000名をはるかに越え、現在では2000名に達しようとしている（1990年7月現在）。

本稿は、このような日本におけるアドラー心理学の現状を、それが紹介された経路をたどりながら、現在の世界情勢の中で位置づけてみたい。さらには、アドラー心理学の広まり方にみられる日本の特徴も描きだしてみたい。

<世界のアドレリアン>

手元にある資料によると、アメリカ約1100人（1989年）ドイツ900人（1984年）と、最大規模の会員数をもっている。その他、オーストリア、オーストラリア、ベルギー、カナダ、フィンランド、フランス、イギリス、ギリシャ、ホンデュラス、ハンガリー、アイルランド、イスラエル、イタリア、ケニア、ルクセンブルク、オランダ、フィリピン、南アフリカ、スペイン、スイスに国際個人心理学会の支部がもうけられている（IPNL, 1984）。

さて、以上のような情勢にある世界のアドレリアンは、現在、大きく分けて二つのグループに分かれている。一つは、晩年のAlfred Adler (1870 - 1937)の影響とRudolf Dreikurs (1897 - 1972)からの直接的影響を受けているグループである。今一つは、Dreikurs, R.の影響を排除して1920年代前半までのAdler, A.の学説に依拠しようとするグループである。前者はDreikurs, R.自身が設立したAlfred Adler Institute of Chicagoを中心としたアメリカのグループであり、そこにカナダ・イスラエル・ギリシャ等のグループが含まれよう。便宜上、これをシカゴ学派と呼ぶ。後者は主にドイツを中心とした中央ヨーロッパのグループで、オーストリア・スイス等を含む。これをドイツ学派と呼ぶ。もっともドイツのアドレリアンはDreikurs, R.の影響を受けているグループと先に述べたグループの二つに分かれているため、ドイツ学派と呼ぶのは正確ではないが、便宜上こう呼ばしていただく。以下、Adler, A.自身の歩みを顧みただ後に、この二つの流れについて

概観してみたい。

<Adler, A. の理論的変遷>

Eva Dreikurs Ferguson (1984, pp1)によれば、Alfred Adler が個人心理学を作り上げていく段階を、3期に分けることができる。第1期は1910年ぐらいまでで、物理的に認めることができる器官劣等性を中心とした理論を展開した。この時期は精神分析への貢献度が大きかった頃で、Freud, S. のサークルを中心に活動していた時期である。第2期は、Freud, S. のサークルから離れた1910年代前半から1920年代前半にかけてである。この頃、第1次大戦に軍医として従軍するとともに、妻の Raissa とともに社会主義運動にも関わった。そのような中で、第1期の理論を発展させて、劣等感という主観的感情とその補償、また、権力への意志という概念を形成し、その根底にある優越欲求に焦点を当てていった。第3期は、渡米し始めた1920年代後半から1937年の彼の突然死までである。晩年の彼は、社会への所属欲求と共同体への貢献、さらには、共同体感覚や対等性に基づく協力関係の形成に強調点を移していった。

このようにみると、Adler, A. の関心は身体的側面から出発し、その個人の主観性に中心を移し、晩年になるにつれ社会との関わり合いをより重視していくようになった、といえよう。いいかえれば、晩年のアドラー心理学は、個人の理解にとどまらず、社会に関わる movement の意味合いを強めてきたようだ。これは彼が渡米してから、特に対等な対人関係を重視し、「再教育」を強調したことからもうかがい知れる。

<第二次大戦前のアドラー派の動向>

Adler, A. が1911年にFreud, S. のサークルを離れ、自らの学派を自由精神分析 freie Analyse と呼んだ。その後1913年に個人心理学会を設立し、1914年には初めての学会誌 Zeitschrift fuer Individual Psychologie を発刊した。

さて、Adler, A. は1922年にウィーンに児童相談所を設置し、その後ナチの台頭によって1936年に閉鎖されるまでに、32ヶ所の相談所が活動した。彼は、1926年から講演のためにたびたび渡米し、1935年にはナチの手から逃れるためにアメリカへ移住し、1937年に他界するまでアメリカとヨーロッパを中心に精力的に講演活動を行った。その後を追い、Rudolf Dreikurs もナチの手を逃れるために、1937年にブラジルを経由して1939年にはアメリカへ渡った。彼も Adler, A. 同様、様々な講演活動を行い、Individual Psychology News 等を出版した (Manaster & Corcini. 1982, p24)。

一方、オーストリアに残ったアドレリアンはどうなったか。彼らのほとんどが、ユダヤ人であったために、ナチの手から逃れる必要があった。ところが、彼らの仕事の対象のほとんどが経済的に貧しい人々であったために、彼ら自身が自らの手で国外へ逃れるだけの経済的ゆとりがなかったのである。その結果、彼らの大半はナチの手にかかり、ガス室でほぼ全滅したといつてよい。ドイツにおいてもその状況は同じで、結局、中央ヨーロッパ圏のアドラー派は一時途絶えてしまったといえる。

<戦後のアドラー派の動向>

第二次大戦後のアメリカでは、Dreikurs, R. が渡米して以後、Alfred Adler Institute of Chicago も彼によって 1952 年に設立され、今日まで途絶えることなくアドラー心理学は発展してきている。特に、彼はアドラー心理学を日常の中に浸透させることに力を注いできた。その結果、Child Guidance Center がアメリカの各所にでき、教育関係とともに一般家庭の中への浸透が深まった。もちろん精神療法も、Dreikurs(1967), Shulman(1968), Mosak(1977)らに代表されるように、飛躍的な進歩を遂げてきた。カナダにおいても同様の発展をみることができる。

ところが、戦後のドイツにおいては、中河原(1990)が紹介しているように、1962年にたった4人ではあるが初めて集まりがもたれ、その後会員を増やしていったが、主に経済的理由から、1970年ごろに組織が一度崩壊し、その後再編された歴史がある。その時点で、ドイツの組織は二つのグループに分かれた。ひとつは、Dreikurs, R. を中心としたシカゴ学派と同一歩調をとり、日常生活の中でアドラー心理学を実践していくグループであり、メンバーは教育関係者を中心としている。このグループは、Adler, A. が1920年代後半から強調した共同体感覚の上に成り立つ対等な人間関係を、治療者あるいは教師が面接室や教室のみならず、自らの生活の中でも実践・形成していこうという、Movementの側面を強調したグループである。いまひとつは、中河原(1990)が詳しく紹介している医師と心理士を中心としたグループである。このグループは、先に述べたようなAdler, A. の初期の業績(1920年代始めまで)主に、精神分析に貢献していた業績に依拠しているグループである。近年では、フロイト派との和解とよべるような傾向を示している(Schmidt, 1987; Titze, 1986)。その結果、主に治療室の中だけでアドラー心理学を適用する結果となり、movementの側面はなくなっている。

<ドイツ学派について>

さて、ドイツにおいて組織がこのようなふたつのグループに分かれてきたいきさつには、当地の職業制度との関連も強いのではないだろうか。ドイツにおいて精神療法家として資格をもらうには、精神分析家のトレーニングが必要とされる。そのため、精神分析ができないことには話にならない。アメリカでは各州から認められた機関で所定のトレーニングをうけ、試験にパスすれば、どのような学派からでも資格はとれるようになっている。つまり、アメリカでは特定の治療技法や流派にこだわることなく資格が取れるが、ドイツでプロとして生きていくには、精神分析がどうしても必要なのである。そのため、ドイツ学派の論文中に、「アドレリアンの精神分析」「退行」「転移」「修正情動体験」「外傷体験」といったフロイディアン・タームが多用されているのであろう。その現状は中河原(1990)の著作に詳しく述べられている。また、フロイト派と対等の勢力をもとうという意図があるような傾向を、アメリカのAnsbacher, H. L.(1985)も示している。そこにはドイツ学派の傾向と似たところが見受けられる。

<ドイツ学派に対する疑問>

Adler, A. は、1911年にFreud, S. の精神分析学会から離れて「自由精神分析協会」を作った。しかし、1913年には内容的に精神分析からまったく離れることを意図して、「個人心理学会」を設立したのである。つまり、「アドレリアンの精神分析」というものは、1913年の時点で消滅してしまっただけである。この点を考えると、中河原(1990)が記述しているような、精神分析をおこなっているドイツ学派の在りようには疑問を感じざるを得ない。ただし、Ansbacher, H. L.(1985)

によると、Adler, A. は、その分析手法として Breuer と Freud の手法を受け入れていたが、Freud, S. の理論は受け入れていなかった。このように考えると、「アドレリアンの精神分析」と呼んでも、さほど差し支えないのかもしれない。しかるに、ドイツ学派の述べている概念にはフロイディアン化したものが多く見られ、アドラー心理学と矛盾するように思える部分がある。

以下、ドイツ学派が述べていることで、理論的に納得いかないものにも触れておく。

I：意識と無意識の関係について考えてみる。Freud, S. は、無意識的内容は意識から抑圧されたもので構成されている、と考へ、そもそも意識と無意識は対立するものとしてとらえた。ところが、Adler, A. は、意識と無意識はともに同じ人生目標に向かって協力する、と述べており、それらは対立関係にあるのではなく、常に同一方向を向いたものとしてとらえた。もちろん、意識的行動と無意識的目的の関係が、逆方向に向いているように見えるものもあるが、その行動の目的は無意識的目的と一致している。

このような Adler, A. の考へは、意識の領域をあつかっても無意識の領域をあつかっても同じライフスタイルにたどりつく、ということを物語っている。

ドイツ学派は、「心的外傷がその人のライフスタイルに大きな影響を与えているので、その出来事を意識化し、子供時代を再体験することが治療につながる」（中河原, 1990, pp165）と考へている。これは、意識と無意識が対立関係にあることを前提にしないとできないことである。つまり、そのときの心的外傷が抑圧されて無意識の中に沈み込んだ結果、現在の状況が形成されている、ということであり、これはれっきとした原因論的考へ方である。目的論的に意識と無意識が同一方向を向いていると考へる場合、このような因果関係をもつことができない。このような心的外傷があったとして、それはそのときのできごと自体が問題なのではなく、そのできごとを今ここで思い出すことが問題なのである。つまり、現在自分が直面しているタスクに関係している記憶を選択的に選び出し、目的追求のために利用していることが問題なのである。いいかえれば、現在のライフスタイルがタスクとの兼ね合いで、その心的外傷体験を利用しているのである。

II：次に、「精神療法は、患者の洞察と情動体験の修正である」（中河原, 1990, P104）という考へ方についてである。Adler, A. は、感情はその人の無意識的目的に従ってそのつど作り出される、人生目標追求のための道具である、と考へた。Ansbacher, H. L. はこれを「使用の心理学」と呼んでいる（Adler, A., 1956, p226）。また、そこで扱われる体験は、その人の主観で色づけされているものであり、客観的事実かどうかは問題なのではない、という「主観の心理学」の立場をとっている（Adler, A., 1956, p3）。

サイコセラピーでは、過去の体験に遡っていく。しかしながら、そこで呼び出す体験の記憶は、現在その人が直面している問題に関連したものをその人が選択的に選びだし、その人に主観によって色づけているのである。それ故、過去の体験そのものを扱うことはできないのである。このことから、外傷体験というものはそもそも客観的に存在するものではなく、ある主観的体験をその人が外傷として規定しているにすぎない、といえる。さらには、その人の現在の認知様式、すなわち、ライフスタイルによって記憶そのものを歪曲して色づけていると同様に、感情も、現在のライフスタイルがその人の人生目標追求のために作り出し、過去の体験の中で使用しているのである、と考へている。

これらからすれば、サイコセラピーは、過去の情動体験そのものを修正するのではなく、過去の記憶を通して現在のライフスタイルの修正をはかっているのである（Adler, A., 1985, p362）。以上のことから、先に述べた「心的外傷がその人のライフスタイルに大きな影響を与えているの

で、その出来事を意識化し、こども時代を再体験することが治療につながる」という考えは、古典的フロイト心理学であって、アドラー心理学とは基本的姿勢が異なっているように思えて仕方がない。

Ⅲ：ライフスタイルを導き出す技法として、夢と早期回想というものがある。ドイツ学派の夢や早期回想の解釈をみると、「夢の中の水は人生の水で、やさしい母親を示しています」「カニは性的象徴を示す」（中河原，1990，pp83）というように象徴解釈の傾向が強く見られる。また、夢や早期回想の解釈において、過去の状況との因果関係を見つけ出すようなアプローチをとっているように見える。

ライフスタイルとは認知様式であるので、その内容が問題なのではなく、その内容を想起し、かつ、治療者に報告することが問題とされるのである。つまり、その内容を選び出す目的と、報告する目的が問題とされるのであって、その中に、その人の信念体系が隠れており、人生目標が潜んでいるのである。象徴解釈から得られるものは、その象徴を作り出すための元になった内容であり、その内容を必要とする認知様式ではないのである。ライフスタイルは、むしろ患者が繰り返しおこなっているさまざまなパターンの中に潜んでいるのである。もちろん、まったく象徴解釈をしないのではないが、それはあくまでもライフスタイルを引っ張りだすことを目的としたものであって、原因となっているできごとを引っ張りだすことを目的としているのではない。ドイツ学派の解釈は、原因となるできごとに接近する傾向をみせている。

Ⅳ：これまでに挙げてきたことのなかにも、原因論的因果論的な見方がかなり見られた。それらについて、さらに補足すると、不安に関する再記述のなかにも同じ様な原因論的考えかたがみられる。「自分がかわることへの不安から起きている」「課題をはたすことへの不安を示しています」というような記述である（中河原，1990，pp109）。これらは、「不安があるから、～ができない」というように、不安を、行動できないことにたいする原因として位置づけている。目的論的な観点からすれば、「自分がかわりたくないために不安を作り上げている」「課題をはたしたくないために不安を作り上げている」とみるであろう。

このように、細かい部分までみていくときりがないので、この程度でやめておくが、ドイツ学派が述べていることは、アドラー心理学のなかにおいてかなり理論的矛盾があるといわざるを得ない。それ以上に、Adler,A. が晩年強調しつづけた、共同体感覚にもとづく対等な対人関係の形成に関して、あまりにも無頓着すぎるきらいがある。ドイツ学派は、movement としてのアドラー心理学を忘れ去り、治療室の中だけでの単なる治療技術としてのアドラー心理学に懲り固まっているのではなからうか。本書にも「共同体感情 Gemeinschaftsgefuehl」というキーワードが数回でてきているが、それもアセスメントのための単なるひとつのパラメーターになりきっているように思えてしかたがない。このようにアドラー心理学を治療室の中だけに閉じ込めてしまっは、共同体との関わりを常に考え、日常生活の中でアドラー心理学を実践しつづけてきた Adler,A. の態度を忘れ去ってしまうこととなり、骨抜きのアドラー心理学になってしまう。

また、Adler,A. がごく初期から好んでおこなってきたようなグループ・カウンセリングの再教育的側面を、ドイツ学派の中に探ることがとても困難なのは、一体どうしたことであろうか。

<日本のアドラー心理学>

日本へは 1982 年に野田俊作が *Alfred Adler Institute of Chicago* で資格を取得して帰国し、アドラー心理学を紹介した。そのようなことから、現在の日本におけるアドラー心理学はシカゴ学派の流れを汲んでいる。つまり、共同体感覚をベースとして横の関係を形成していくことを重視した、*movement* としてのアドラー心理学である。Dreikurs, R. は、すべての問題を解決していく鍵は民主主義の確立である、と様々な著作の中で強調している (1964, 1967, 1984)。そこから、親教育や夫婦教育といった各種のプログラムは、すべて家庭内民主主義の確立を目指したものとなっており、教師に対する教育プログラムも、学校内民主主義の確立を目指したものである。カウンセリングやサイコセラピーにおいても、最終的にはすべて共同体感覚の育成を目的としており、対人関係の中における民主主義の確立を目指しているのである。

最後まで Adler, A. が治療の中で強調した、共同体感覚の育成と治療の再教育的側面を重要視するならば、治療室の中だけにとどまらず、日常生活の中でもアドラー心理学を具現化していくことが必要であろう。これは Adler, A. 自身が実践し体現してきたことである。それを Dreikurs, R. が発展させたといつてよい。そこから考えると、ドイツ学派は、アドラー心理学の退行と固着をおこしているといえよう。

<アドラー心理学の日本の特徴>

世界にはみられない日本の特徴は、アドラー心理学を東洋思想からのとらえ直しを試みていることだ。特に、瞑想を利用したアドラー心理学の実践は、他に類をみないものである (Noda, S., 1985, 1989)。全対論と現象学的側面への接近はとくに興味深いものを見せている (野田, 1987)。

治療においてもその文化的差から、カウンセリング場面において、強調点が若干ちがっているようだ。端的に言えば、勇気づけと課題の分離の強調の仕方に差がみられるのである。その点を以下に述べてみたい。

アメリカでは、個人の責任というものは、日常生活のなかでたえず強調されている。それ故、親子であっても全く異なった意見をもつことが許され、自己主張することが奨励されているといえよう。と、同時に、個人の行動の責任はその個人がとるように強く求められている。これはともすれば、冷たい関係を形成していくことになりかねない。そこで、まず強調されることは、お互いの勇気づけである。また、相手を放っておくのではなく、協力者として関わることを強調するのである。

さて、日本では、こどもの個人の責任を問うことはむしろ少なく、逆に、こどもの責任を親が肩代わりすることが当然のごとくおこなわれている。責任の取り方を親自身も知らないため、どのようにしたら、こどもが責任をとれるようになるかがわからないのである。その根本は、土居の「甘えの構造」(1971)にみられるような過保護的關係から生じているのではないだろうか。

そのため、まず、家族カウンセリングでおこなうことは、課題の分離である。勇気づけを先に強調すると、これまでのよけいなお節介をさらに強調することになりかねない。こどもが自分の責任をとれるように勇気づけるためには、まず、親が自分の課題は何かを自覚し、こどもはこどもの課題をひとりで解決していけるにちがいない、と信頼し、こどもの課題に踏み込まないことが前提になる。つまり、こどもの課題に口だしせずに見守ることができて、はじめて本来の勇気づけが可能となるのである。

いふならば、アメリカでは、個人個人の結びつきが薄いため、他者の関心にたいして関心を持ち、お互いの結びつきを強めていく必要があるのではないだろうか。また逆に、日本では、個人個人の結びつきが強すぎるため、それらを一度切り離していく必要があるのではないだろうか。

<要約>

本稿では、アドラー心理学の国際的動向をとらえ、その中で日本のアドラー心理学の位置づけをおこなった。そして、日本の特徴と思われるものを挙げてみた。

アドラー心理学の国際的動向として、Adler, A. の初期の業績に依拠しようとするドイツ学派と、晩年に強調した共同体感覚をベースとした協力関係を日常の中で形成しようとするシカゴ学派の二つがある。日本のアドラー心理学はシカゴ学派に属し、日常での実践、具現化を強調する。それにひきかえ、ドイツ学派は治療室内のみでアドラー心理学を利用するという傾向がみられる。

日本におけるアドラー心理学の特徴は、東洋思想からのアドラー心理学のとらえなおしをおこなっていることであり、瞑想をもちいることは類をみない。治療場面では、甘え構造に代表されるような、個人の結びつきの強さから、課題の分離が強調されている。

<最後に>

本稿で述べたことは、まったく著者の個人的見解である。そのため、まったくの誤解を含んでいる可能性もなきにしもあらず、である。それ故、読者の方々からの率直なご意見をいただければ幸である。

<文献>

- 1) Alfred Adler (1956) : THE INDIVIDUAL PSYCHOLOGY OF ALFRED ADLER, (H.L. & R.R. Ansbacher Ed.), Harper Torchbooks, New York
- 2) Ansbacher, L. A.(1985) : A MORE FLEXIBLE,STRONGER POSITION.Individual Psychologie News Letter, PP.24-26, Munchen.
- 3) 土居健郎 (1971): 甘えの構造、弘文堂
- 4) Dreikurs, R. (1967) : PSYCHODYNAMICS, PSYCHOTHERAPY, AND COUNSELING,Alfred Adler Institute of Chicago
- 5) Dreikurs, R., Shulman, B. H. & Mosak, H. H. (1984) : MULTIPLE PSYCHOTHERAPY, Alfred Adler Institute of Chicago
- 6) Dreikurs, R. & Soltz, R. N. (1964) : CHILDREN: THE CHALLENGE, HawthornBooks
- 7) Ferguson, E. D. (1984) : ADLERIAN THEORY, An Introduction,Adlerian Psychology Association of British Columbia
- 8) IPNL (1984) : INDIVIDUAL PSYCHOLOGY NEWS LETTER, Organ of the International Association of Individual Psychology, Munchen, Vol.32, No.2
- 9) Manaster & Corsini (1982) : INDIVIDUAL PSYCHOLOGY. F. E. Peacock Publishers
- 10) Mosak, H. H. (1977) : ON PURPOSE, Alfred Adler Institute of Chicago
- 11) 中河原通夫 (1990) : ミュンヘンのアドレリアン、尾和書店
- 12) Noda, S. (1985) : BUDDHISMUS UND INDIVIDUALPSYCHOLOGIE, Z. f. Individual psychologie, 10.Jg.,S. 212-25
- 13) 野田俊作 (1987) : アドラー心理学の東洋的展開、アドレリアン、Vo1.2, No1, pp3-8
- 15) Noda, S.(1989) : INDIVIDUALPSYCHOLOGISCHEGRUPPENTHERAPIE UND MEDITATION,

- Z. f. Individualpsychol., 14. Jg.S. 121-128
- 15) Power, R. L. (1985) : AN INCREASING RELIANCE UPON FREUDIAN TERMS, Individual Psychology News Letter. PP. 22-24. Munchen.
- 16) Schmidt, R. (1987) : DIE ENTWICKLUNG DER INDIVIDUALPSYCHOLOGIE IM DEUTSCHSPRACHIGENRAUM NACH DEM ZWEITEN WELTKRIEG, Z. f. Individual psychologie, 12. Jg., S.244-257, Ernst Reinhardt Verlag, Munchen, Basel
- 17) Shulman, B. H. (1968) : ESSAYS IN SCHIZOPHRENIA, The Williams & Wilkins CO., Baltimore (精神分裂病者への接近、1978、岩崎学術出版)
- 18) Silverman, N. (1985) : FATHER ADLER, YES; GRANDFATHER FREUD, NO., Individual Psychology News Letter. PP.16-18, Munchen.
- 19) Titze, M. (1986) : INDIVIDUAL PSYCHOLOGIE EIN TEIL DER TIEFENPSYCHOLOGIE, Individual Psychology News Letter, PP.11-12, Munchen

更新履歴

2012年6月1日 アドレリアン掲載号より転載